

国立公園誕生にみる越境と視座の相違

真 野 剛

松 山 大 学
言語文化研究 第34巻第2号（抜刷）
2015年3月
Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 34 No. 2 March 2015

国立公園誕生にみる越境と視座の相違

真 野 剛

1. 福島第一原発の事故

2011年3月11日に太平洋三陸沖で発生した大地震をきっかけとして発生した、福島第一原発の事故は、原子力発電というエネルギーシステムが抱える危険性をあらためて浮き彫りにした。世界中に原子力の恐ろしさを改めて提示したこの事故は、2012年4月12日に事故終息宣言がなされたものの、それ以降も警報装置の作動や、冷却水漏えいといった事故が相次いだ。それにもかかわらず、各地原発の再稼働認可の申請をめぐる政治活動をみると、まるで福島原発の大惨事が随分昔のことであったかのような雰囲気を感じざるをえなかった。当時、与党であった民主党政権内での見解不統一や、各電力会社の株主総会紛糾といった現実を無視し、不十分な調査にもかかわらず自信あふれた首相の再稼働推進発言は、脱原発論者でなくとも異様に思えたのではなかろうか。また、巨額の公的資金の介入にもかかわらず、自己資産や利益を守るかのようなあたかも被害者のような立場を装う東京電力の会長の言動や、さも当たり前かのように利用料値上げに取り組む姿勢は、世間から批判を浴びて当然だったと言えよう。9.11の同時多発テロと同様に、「3.11」という言葉が福島第一原発の事故を想起させ、また「ヒロシマ」と並んで、「フクシマ」という地名が、世界的に知れ渡る起因となったこの事故は、単に天災でなく人災でもあったこととは言うまでもない。

原子力発電所などになんらかのトラブルが生じた際、その事象の度合いを「International Nuclear Event Scale（国際原子力事象評価尺度）」という尺度で測

る。これは IAEA（国際原子力機関）と OECD/NEA（経済協力開発機構の原子力機関）によって、1989年に策定された国際的な判定尺度であり、深刻度合いによってレベル1から7まで判断される。その主たる目的は、専門家たちのみならずメディアや一般大衆に対しても、事象の正確な情報を開示することにある。福島第一原発事故の場合、当初レベル4であった福島原発の事故は、被害状況の深刻さが公になるにつれ、レベル段階が上がっていき、1か月後には最大のレベル7にまで到達してしまった。過去に発生した世界的な原発事故を事例としてみると、1979年にアメリカのスリーマイル島原発で生じた事故がレベル5、1986年旧ソ連のチェルノブイリ原発の事故がレベル7となっており、Maxのレベル7にまで至った事故は、チェルノブイリと福島第一原発の二つのみである。当然ながら、他の原発事故地域同様に、福島第一原発・周囲一帯の土壌ならびに海洋は放射能により汚染され、生態系を含め甚大な環境破壊を引き起こした。こうして福島で発生した、水素爆発、メルトダウン、そして放射性物質の漏出の一連の事故は、原子力の恐ろしさを改めて世界に知らしめる結果となった。チェルノブイリと並び最悪の事故となってしまった福島県は、惨劇の舞台として、ヒロシマ、ナガサキに次いで、フクシマとして世界的に知られる都市となってしまった。尊い命が失われると同時に、一方でこの悲劇を繰り返してはいけないという動きが一般市民を中心として、草の根的に世界中で起こったのもまた事実である。

こうした風潮の中、1993年に上遠恵子の訳で宝島社より出されていた、レイチェル・カーソン（Rachel Carson）の『潮風の下で』（*Under the Sea-Wind.*）が、2012年の4月に岩波文庫より再び出版された。カーソンの作品は世界中で翻訳がなされ、日本においてもこれまで長きにわたり親しまれてきた。そのうち、本書は福島第一原発の事故後、初めて再版がなされた作品である。日本におけるカーソン研究の第一人者である上遠は、この新しい版の出版に際し、新たにあとがきを追加している。その中で、地球は人間だけのものではなく、『潮風の下で』に登場するたくさんの生き物たちと共に生きる星であることを

自ら再認識するかのように語る。同時に、「食物連鎖による放射線物質の更なる拡大」、「海洋ならびに河口部の土壤汚染」を指摘しつつ、次のように、カーソンの危惧がまたしても現実のものとなってしまうことを嘆く。

「海を研究し海を語ってきたレイチェル・カーソンは、半世紀以上も前に科学技術という強大な力を手にした人間の文明のありように深い危惧の念を抱き警鐘を鳴らしたのです。彼女は天国からどんな思いでこのちきゅうを見ているでしょうか。」(上遠 261)

かつて人類の所業に大きな懸念を抱いたカーソンの嘆きを想起させるこの言葉は、文明がさらに高度化されてもまだなおも解決されていない大きな問題の存在を我々に直視させるものである。

2. 20 世紀中葉にみるアメリカ環境問題の変容

1854 年に出版された『ウォールデン 森の生活』(*Walden*)の著者として知られるコンコードの H. D. ソロー (Henry David Thoreau) や、国立公園の父として讃えられるシエラ・ネヴァダのジョン・ミューア (John Muir) らは、自然の共生や関わり合いに深く関心を持ち、生涯をその活動に捧げた。彼らの著作および活動は、同時代的にはまだほんの小さな運動にしかすぎなかったが、そうして蒔かれた環境保護運動の種は、20 世紀なかばから、徐々に日の目を見ることとなる。中でも特に大きな変革期として、米国森林局出身のアルド・レオポルド (Aldo Leopold) の存在は無視できない。1949 年、前年にこの世を去ったレオポルドの著作『野生の歌が聞こえる』(*A Sand County Almanac*) は、環境問題へ取り組む姿勢に大きな一石を投じた。レオポルドは、ソローやミューアの影響を強く受けており、同書では自然描写と共に、通常は人間社会間でのみ用いられる倫理を、土地にまで拡大させた概念 “land ethics” (土地倫理)

を展開しつつ, “The land ethic simply enlarges the boundaries of the community to include soils, waters, plants, and animals, or collectively: the land.” (204) として土地を一つの共同体をして捉える考え方を提示した。土地倫理の概念に従えば, その土地を構成するあらゆる存在が一つの共同体を形成しており, それぞれが固有の価値を持っているというわけである。さらに, “[...] a land ethics changes the role of Homo sapiens from conqueror of the land-community to plain member and citizen of it.” (204) と加え, 土地倫理は人間の役割さえも, 征服者から一つの構成員へと変えるのだと語る。元来, 他者であった自然との融合を図り, 倫理観を持ち込むことにより, 自然との共生を強く打ち出したこの作品は環境倫理の礎を築きあげ, その功績により, 1978年には自然誌関連の優れた書籍に贈られるジョン・パロウズ賞を受賞することとなった。

時同じくして, カーソンもまたこうして, 従来ないがしろにされてきた自然の権利が認知され始めた同時代に活躍した作家の一人であった。『沈黙の春』(*Silent Spring*) と題された日本でも有名な彼女の著作は, 放射性物質との繋がりとともに農薬 DDT (dichloro=diphenyl=trichloro=ethane) の危険性を指摘したものであり, ニューヨーク・タイムズで絶賛されると, 瞬く間に世界中で広く読まれることとなった。元々, 海洋生物学者であったカーソンには, 1941年の34歳の時に出版した『潮風の下で』を始め, 主なものとして5冊の著書があるが, 同書を始めとして1951年の『われらをめぐる海』(*The Sea Around Us*), 55年の『海辺』(*The Edge of the Sea*) は, 海の三部作として知られ, カーソンの知識およびレトリックを通して海に生息する生物たちの豊かな世界がロマンチックに描かれており, まさに海洋生物学者と小説家の側面が見事に融合した作品となっている。また1964年, 生前に *Woman's Home Companion* に掲載した “Help Your Child to Wonder” を下地として, 友人たちの協力により死後出版された『センス・オブ・ワンダー』(*The Sense of Wonder*) は, 子供を育てる親たちに対して, 自然の持つ神秘や不思議さに目を向ける感性の重要性を説いたものとなっている。そうした作品に対して『沈黙の春』は, 終始一

貫して DDT などの化学物質の危険性とそれによる環境汚染を訴えるルポルタージュ作品だが、ローレンス・ビュエル (Lawrence Buell) は『沈黙の春』が社会政策に重要な影響を与えた理由として、カーソンがそのような作品の執筆を可能としたからであり、単に自然の美しさを称賛するだけの作家であったのであれば、ここまでの功績とはなっていなかったのだと述べ、彼女のネイチャーライターとしての際立った資質を指摘する (3)。

『沈黙の春』によるカーソンの訴えは、大きな波紋を呼び、合衆国政府の政策にも影響を与えた。1969 年の National Environmental Policy Act (国家環境政策法) の制定は当時、世界的にも先進なものであり、連邦政府のあらゆる事業に対して、自然環境へ及ぼす影響を精査する、いわゆる環境アセスメントの導入を図ったものであった。翌年の 1 月 1 日に施行された、環境と生物圏の被害を防止しつつ、生態系および自然資源への理解を深める、この法律はまぎれもなく、合衆国の環境政策を大きく前進させるものであったし、同年の Environmental Impact Statement (環境保護庁) の設立を考えると、合衆国がいかに本腰で取組んだのか明確である。この点について、多田満は『沈黙の春』を「…アメリカ国内のみならず、その後の世界の環境政策の羅針盤の役割を果たしてきたといっても過言ではないだろう」(149) と評価している。『沈黙の春』の中で、最も危険な薬剤として幾度となく登場した DDT への言及は、「『沈黙の春』=DDT の危険性を説いた書」という図式を定着化させた。しかしながらカーソンは、DDT を始めとする殺虫剤の危険性のみを危惧しているわけではないことは極めて重要である。例えば次の一節をみると、カーソンが殺虫剤のみならず、水質汚染の一役を担うもの全てに対して、扱い方を再考する必要性を述べているのが分かる。

“The problem of water pollution by pesticides can be understood only in context, as part of the whole to which it belongs—the pollution of the total environment of mankind.” (Carson, *Silent* 39)

加えて水質汚染の様々な根源を明確に列挙する。廃棄物が混ぜ合わさることで、それ自体が放射能並みの脅威になるし、あるいは放射能の効果を高めたり、新たな汚染物質の誕生にも繋がる可能性があるのだと言う。

“The pollution entering our waterways comes from many sources : radioactive waste from reactors, laboratories, and hospitals ; fallout from nuclear explosions ; domestic wastes from cities and towns ; chemical wastes from factories.” (39)

そもそもカーソンは、広島、長崎の原爆投下を機に反核運動を展開しノーベル平和賞を受賞したアルベルト・シュバイツァー (Albert Schweitzer) 博士に深く傾倒しており、冒頭の捧辞文で、シュバイツァーの言葉を引用している。

To Albert Schweitzer
who said

“Man has lost the capacity to foresee
and to forestall. He will end by
destroying the earth

(*Silent Spring*)

神学者、哲学者、医師、音楽家など多才な人物であったシュバイツァーは、「生命への畏敬」思想でよく知られていた。原は、シュバイツァーがラジオ放送で述べた放射線の影響過程と、カーソンが『沈黙の春』で述べた殺虫剤、あるいは化学物質の影響過程の構成が同じであると指摘する (82-83)。また伊藤は、ビュエルが「汚染の言説」として、カーソンの偉業を捉えたことに触れながら、『沈黙の春』における農薬散布の殺傷作用がまるで広島と長崎に降り注

いだ「黒い雨」を喚喩的に想起させる描写になっているのだと語っている(118)。

3. 福島第一原発事故とレイチェル・カーソン

さて、冒頭でも述べたように、フクシマから1年を経てリリースされた『潮風の下で』の再出版はいかなる意味を担うのだろうか。本書は全編を通じて、魚を始めとする海中や海辺に生息する生き物たちが主役となって描かれた作品であり、まるで読者が海の中など生き物たちの世界に飛び込んで彼らを見るような手法がなされている。生き物たちには、ミユビシギのブラックフットやシルバーバー、サバのスコムバー、ウナギのアンギラなど、それぞれが分類学上の学名を始めとする科学的根拠に基づいて、名前を与えられている。また時には、被写体に対するカメラワークを変化させるかのごとく、視点が推移するような場面がみられ、臨場感あふれるドラマを見ているかのように自然の摂理が描かれる。たとえば、スコムバーという名で登場するサバが自分より大きな魚の標的となる描写がある。

“In the surface waters Scomber first knew the fear of the hunted. ...The foremost anchovy caught sight of Scomber. Swerving from his path, he came whirling through the yard of water that separated them, openmouthed, ready to seize the small mackerel.” (130-31)

こうした手法は、生き物の生活を単に観察対象とするのみならず、臨場感あふれる距離で彼らの視点に立ちながら、読むことを可能とさせている。そうすることで、読者に彼らの個々の生活を意識させ、より身近なものとして生き物を扱うこととなる。カーソン研究で名高いリンダ・リア (Linda Lear) は本書を含むカーソンの海の三部作を、「人間の存在というさらに大きな問題にも言及

している」と評し、さらに「(そこで) 描き出す生と死のとぎれない流れは、人間存在の苦闘に対するある種の楽観的な見方を与えてくれる」のだと述べる(153)。

フクシマにおいて人間という存在により、“自然の摂理を排した”生死の狭間でいきる生き物たちの現状はいかなるものであろうか。ジョン・バロウズ(John Burroughs)の“Real and Sham Natural History”(Atlantic Monthly)に端を発したNature Faker論争において、テディの愛称で親しまれた第26代合衆国大統領セオドア・ルーズベルト(Theodore Roosevelt)はバロウズや国立公園の制定に尽力したミューアらを賞賛する一方で、ウィリアム・ロング(William J. Long)を“the most reckless and least responsible”と痛烈に批判し、その最たる責任は彼らに敬意を表したり、不実な作品を許したりしたあらゆる人々にあると追及した。バロウズはもともとラルフ・ウォルドー・エマソン(R. W. Emerson)やソローに深く傾倒しており、中でもソローに関しては崇拜の域に達しており、『ウォールデン 森の生活』での生活を自身でも実行するほどの熱狂振りであった。そのため、ソローの作品と自分の作品が比較されることも多く、ソローの作品は倫理的を説くことを目的としたのに対し、自分の作品は芸術を目的としていると述べるとともに、前者を主観的、後者を客観的なものであるとして特性の相違を明確にしている。

彼らの主張する、“Real”という言葉に照らし合わせるならば、それは行政によりないがしろにされたといってもよい現実が存在するのではないだろうか。真に“無人”となった地で、それまで人間とともに生活してきたドメスティック・アニマル(ペット・家畜)は、生きるすべを失った。外部被爆に加え、放射性降下物質による内部被爆を受け、さらには置き去りとなってしまった生き物たちの悲観の姿を、八木澤の『フクシマ2011、沈黙の春』などが捉えている。

ビュエルは、レオポルドの*A Sand County Almanac*が“かもしれない”という曖昧な表現を常用している点に着目し、この書が単なる教訓じみたものではなく、聞き手に問題点を提示した上で、自ら歩むべき道を考えさせようとして

いると述べる。『潮風の下で』では作品の最後に、次のように海と陸地について語る場面がある。

For once more the mountains would be worn away by the endless erosion of water and carried in silt to the sea, and once more all the coast would be water again, and the places of its cities and towns would belong to the sea. (272)

地質学的時間の中では、現在風景はわずかひとときのものでしかなく、生命を育んできた海による創造と再生が繰り返される。この生と死がおりなすドラマもまた人間に問題提起をおこすものであると言える。

4. 国立公園の誕生

現在、豊かな自然の景観を破壊や搾取の対象から守るべく、世界中の国々で公園指定の制度が導入されており、法規制を行うことで指定地区の自然は保護されている。この目的を担うべく公園と称されるものにはいくつかあり、国によって形態や規模、認識は様々に異なる。たとえば日本では図1に示すように、大別して3つに分類されており、指定者、法律、管理行政がそれぞれで異なっているのが分かる。

図1 日本の国立公園

| 種 別 | 国立公園 | 国定公園 | 都道府県立 自然公園 |
|-------|---------|---------|---------------|
| 指 定 者 | 環 境 大 臣 | 環 境 大 臣 | 都道府県知事 |
| 法 律 | 自然公園法 | 自然公園法 | 都道府県条例 |
| 管理行政 | 環 境 省 | 都 道 府 県 | 都 道 府 県 |

このうち最たるものが国立公園であり、その名が示す通り、国の保護および管理により庇護されたものです。環境省自然環境局は国立公園の定義を次のよう

に定めている。

「我が国の風景を代表するに足りる傑出した自然の風景地（海域の景観地を含む。）であって、環境大臣が自然公園法第5条第1項の規定により指定する」（『国立公園』）

我が国の国立公園の歴史をみると、1931年の国立公園法の制定から日本の国立公園の歴史が幕を開ける。これは、国立公園の選定に関する事項から執行内容にいたるまでを法規化したものであった。そのため、この時点ではまだ国立公園は存在せず、3年後の1934年3月に日本初の国立公園として、瀬戸内海、雲仙、霧島の3つが指定された。それに加えて同年12月に、大雪山、阿寒、日光、中部山岳、阿蘇の5つが加わった。その後、先述した国定公園や生態系保護、海中地域など多様化をしながら、国立公園法は、内容の整理、実効性の改善などを目的に1957年に自然公園法へと姿を変え現在へと至る。近年では、2012年に誕生した霧島錦江湾国立公園と屋久島国立公園がある。これは実際には日本初の国立公園の一つ霧島国立公園が、錦江湾国定公園や屋久島を併合し、霧島屋久国立公園となったものが再び分割され名称変更がなされたものであるため、厳密に言えば新たな国立公園とは言えないかもしれない。そのような併合、分割なども経て、現在、日本には31の国立公園が存在する。そもそもこの国立公園の制度はどのように始まったものであろうか。

国立公園の制度の起源を探ると、アメリカのイエローストーンに辿りつくことができる。1803年にルイジアナ買収がなされると、第三代アメリカ合衆国大統領であったトマス・ジェファースンは、合衆国陸軍の尉官（いかん）であったメリウエザー・ルイスとウィリアム・クラークに、ミシシッピ川から太平洋にいたるまでの水路および、通商を目的とした最短陸路の発見を命じ、ここにルイス＝クラーク探検隊が組織された。ヴァージニアの調査報告書をまとめた『ヴァージニア覚書』（1785年）にもみられるように、ジェファースンの自然

観というのは、実利的な価値が付随しているものであった。探検隊は2年にもおよぶ探検活動の過程で、スー族やブラックフット族といったネイティブ・アメリカンの諸部族と遭遇し、その過程で交渉あるいは折衝を行いながら、探検を続けることとなる。ジェファースンの期待通り、太平洋への到達を成し遂げた一団は、1806年に多量な見聞録とともに、セントルイスへと帰郷する。この探検隊の中にジョン・コルター（John Colter）という人物がいたが、彼の行動がイエローストーンが存在を明らかにしていく。探検隊から離れた後もなお、西部へとどまり続けたコルターは、現在のワイオミングの北西、ちょうどモンタナ州とアイダホ州との州境に位置するイエローストーンの地に足を踏み入れる。そこで地熱による天然の温泉、間欠泉を目にしたコルターはセントルイスに戻るのだが、真実味を欠いているととらえられ、悲運にも人々の記憶からは一度は忘れ去られることとなる。しかしながら、コルター以降もこの地を訪れた人物がおり、1859年に地質学者のフォーディナンド・ヘイデン（F. V. Hayden）を中心に探検隊が組織される。彼らはイエローストーン目前までたどり着いたものの、天候不良によりこれ以上の進行を断念せざるをえず、また折しも1861年の南北戦争勃発により、この調査は失敗に終わる。それからおよそ10年後、1870年にはモンタナの公有地監督官ヘンリー・ウォッシュバーン（Henry Washburn）、ナサニエル・ラングフォード（Nathaniel Langford）、陸軍少尉グスタフ・ドーン（Gustavus C. Doane）の3人に率いられた探検隊が結成され、それぞれの名をとって、Washburn-Langford-Doane Expeditionと名付けられた。また、翌年の71年には、ハイデンが11年越しとなるイエローストーンに再び挑み、イエローストーンの調査報告が合衆国政府の元へと持ち帰られ、その価値が認められることとなった。そして、1872年、第18代合衆国大統領ユリシーズ・グラント（Ulysses S. Grant）のイエローストーン国立公園設置法案への署名をもって、ここにアメリカ初、ないしは世界初となる国立公園が誕生することになる。その最初の監督者として任命されたのがラングフォードであり、彼はほどなくしてイエローストーン国立公園の資金、人員不足とい

う積み重なる問題に直面することとなる。

さて、カリフォルニア山脈のシエラ・ネヴァダを主な拠点とし、シエラクラブの設立者でアメリカの自然保護活動のパイオニアとも言えるミューアも当然ながら、イエローストーンへの言及を行っており、1892年に記した著 *Our National Parks* (1892) の中で、イエローストーンのことを次のように述べている。

During the eruptions of the smaller geysers, such as the Beehive and Old Faithful, though a little frightened at first, all welcome the glorious show with enthusiasm, and shout, "Oh, how wonderful, beautiful, splendid. majestic!"
(*Our National Parks* 40)

イエローストーンの特徴とも言える geyser (間欠泉) がいかに物珍しいものであったのか、コルターの話聞いた人々の反応やミューアの叙述から明らかである。加えてミューアは、アイスランド、ニュージーランド、日本、ヒマラヤ、東エーゲ海、南アメリカ、アゾレス諸島、などにも間欠泉が存在するが、中でもアイスランド、ニュージーランド、ロッキーマウンテンの3つは最も壮大なものであり、とりわけイエローストーンが一番であると加えている (*Our National Park* 41)。

ただし、確かにイエローストーンが国立公園第1号となったことは事実であるが、それ以前にも既に自然保護区の公園として名を馳せた土地が存在した。イエローストーンと並ぶ知名度をほこるヨセミテである。ヨセミテは国立公園としては後発だったものの、保護対象の存在として早くから見られていたわけである。いずれにせよ、自然保護区として指定された場所とは神聖で美化された土地、まさにユートピア然とした場所であったわけであるが、実は人為的にそのように整備されたものでもあった。すなわち、公園整備のために排除された者たちがいた。

5. 崇高美を目指した排斥

17世紀後半、マサチューセッツ湾植民地はプリマス植民地を吸収し、ニューイングランドで最大の植民地となる。植民地化のこうした拡大により多くのイギリス人たちが流入し、ネイティヴアメリカンの部族は否応なく西洋文化と接触をせざるを得なくなり、その結果、彼らの生活は大きく様変わりしていった。その理由の一つとしては、それまで同じ大陸で似通った文明であったがゆえに一定の均衡を保ってきた部族間同士の関係が、白人によってもたらされた金属製の道具や器具、あるいは火器類によってバランスを崩し始めたことがあげられる。白人文化を積極的に受け入れた部族は力を増し、反面、そうでない部族は壊滅的な打撃を被り、その格差が部族間の軋轢を生んだわけである。

こうして白人文化との接触はネイティヴアメリカンの諸部族間に格差を生んだが、言うまでもなく彼らと白人社会との間にはもっと大きな格差が生じていた。というのも、スペイン人は主としてキリスト教の伝道を、フランス人は毛皮交易を、イギリス人は土地の拡張を目的としていたが、基本的に白人たちは一様にネイティヴアメリカンを野蛮で自分たちよりも下部の存在とみなし、彼らを迫害、排斥する立場に追い込んでいくからである。しかも、諸外国が利権を争って対立を始めると、彼らは武力としてネイティヴアメリカンを利用するようになる。また、イギリス本国からの実行支配から逃れたいアメリカとイギリス本国との間の争いが激化し、イギリスによる世界的な支配に不満を持っていたスペインやフランスがアメリカ側に加担すると、イギリスは支配者たちから先住民を保護するという大義名分によって、多くの部族を自身の側に取り込み、彼らを白人同士の争いを有利に展開させるためのコマとして利用していった。こうした、白人の利益優先の考え方に基づくネイティヴアメリカンの扱いは、1783年に独立戦争が締結した後も変わることなく、やがて強制移住政策など、さらに過酷さを増していくこととなる。

先住民研究者のウィリアム・T・ヘーガン（William T. Hagan）が⁸、「白人間

の諸戦争と奴隷の必要性がインディアンたちを互いに戦わせる起動力となったが、白人のみがその勝利者となりえたのである」(24)と語っているように、白人の戦いに荷担したネイティヴアメリカ人たちは、それによって何ら恩恵を被ることはなかった。それどころか、「ある担当官はその戦術について、一群の狼を他の群れと戦わせるようなものである」と見なしていたとヘーガンが指摘しているように、白人たちはネイティヴアメリカ人を自分たち人間よりも劣る存在として扱い、自らの繁栄を築き上げるための道具としか考えていなかった。

コンコードを中心に活躍したソローは『ウォールデン 森の生活』のほか、1849年の『市民政府への反抗』([*Resistance to*] *Civil Disobedience*), 1864年の『メインの森』(*The Maine Woods*)などでも有名であるが、それ以外にもネイティブアメリカンに関する12冊のノート『インディアン・ノートブック』(*Indian Notebooks*)を残していたことでも知られている。生前の未刊原稿であり、書籍としてはリチャード・フレック(Richard F. Fleck)が1974年にハミングバード出版から出しているが、これはキーワードごとに一部を抜粋したいわば名言集のようなものであった。近年に入り、ウォールデン湖畔の豆畑の正確な位置を特定したことで知られるブラッドレイ・P・ディーン(Bradley P. Dean)によって、全てを集約した完全版とも言えるものが編纂されつつあった。原稿はネイティヴアメリカンの日常的な品物や、部族ごとの言語を収集したもので、4千ページに及んでおり、ソローが奴隷制度への深い憂慮だけでなく、ネイティヴアメリカンにも深い敬意を寄せていたことが分かった。ソローのネイティヴアメリカン観に大きな影響をもたらし、彼の生涯において最も印象深く記憶に残っていた人物が、ジョー・ポリス(Joe Polis)であった。ソローは、ウォールデン湖畔滞在中の1846年夏に、従妹のサッチャーとともにメイン州にあるクターデン山に登っている。これに始まり、1853年、1857年と、彼は三度に渡ってメインの森を探索した。その体験はソローの死後、1864年に、『メインの森』として編纂されたわけだが、その最後の旅でガイド役を務

めたのが、ペノブスコット・インディアンの彼であった。ソローは初めて彼に会った時の印象を、“He was stoutly built, perhaps a little above the middle height, with a broad face, and, as others said, perfect Indian features and complexion.” (Maine 207) と述べていることから分かるように、これまで接触がほとんどなかった異質の存在としてみていたことが窺える。

しかし、彼と時間を共有するうちに、ソローが彼に向ける眼差しには徐々に尊敬の色が濃くなり、彼の持つネイティヴアメリカン特有の知恵と知識に感嘆したソローは、1857年8月、弟子であったハリソン・グレイ・ブレイク (Harrison Gray Otis Blake) に宛てた書簡で、彼への賞賛を惜しまずに語っている。

The Indian who can find his way so wonderfully in the woods possesses so much intelligence which the white man does not, and it increases my own capacity as well as faith, to observe it. I rejoice to find that intelligence flows in other channels than I knew – It redeems for me portions of what seemed brutish before. (154)

エマソンが語るように、ウォールト・ホイットマン (Walt Whitman)、活動家のジョン・ブラウン (John Brown) と並んで、ジョー・ポリスもまた、ソローにとっての英雄であり、その存在はソローの自己啓発に深く影響を与えていたことが分かる。当時の誰しもが思い描いていたネイティヴアメリカンの粗野なイメージに捉われず、ソローがこのような影響を受けることができたのは、彼が身に付けていた、肌の色や人種といった表面上の違いではなく内面を見ようとする姿勢によるものだったと言えよう。

そんな一人のネイティヴアメリカンとの出会いが、自己発展への糧ともなったソローに対し、ミューアはネイティヴアメリカンとの出会いはどのように感じていたのだろうか。ミューアは初めてシエラ・ネヴァダを訪れた時のことを

『はじめてのシエラの夏』(*My First Summer in the Sierra*)で記しているが、その際、ネイティブアメリカンの女性たちが楽しそうに稲やライ麦を集める作業をしている場に出くわす。その際、目にした彼らの暮らしについてこのように語っている。

..., though most Indians I have seen are not a whit more natural in their lives than we civilized whites. Perhaps if I knew them better I should like them better. The worst thing about them is their uncleanness. Nothing truly wild is unclean. (*My First Summer* 226)

ヘーガンが述べたネイティブアメリカンへの典型的な白人目線と同様に、ミューアは彼らの暮らしを自分たち文明化された白人よりも劣る非文明的なものと見下し、不潔だとして嫌悪感を顕にしている。このマニフェスト・デスティニーからなる白人優位主義の立場は、他にも見らる。シエラ・ネヴァダへとたどり着くわずか一年前の1867年9月1日、ミューアはインディアナポリスを出発し、キューバのハバナにいたるまでの1,000マイルの徒歩旅行に出かける。その旅での日記をまとめたものとして『1000マイルウォーク緑へ——アメリカを南下する』(*A Thousand-Mile walk to The Gulf*)という作品がある。その旅の途中でフロリダへとたどり着いた際に、一組の黒人夫婦と偶然出くわすが、この時、咄嗟に目に映り込んだ光景をこのように述べている。

In the center of this globe of light sat two negroes. I could see their ivory gleaming from the great lips, and their smooth cheeks flashing off light as if made of glass. Seen anywhere but in the South, the glossy pair would have been taken for twin devils, but here it was only a negro and his wife at their supper. (*A Thousand-Mile* 105-6)

さらに、キューバのハバナに滞在中に港で見かけた黒人労働者の描写にも、現代では禁忌の表現が用いられている。

In Havana I saw the strongest and the ugliest negroes that I have met in my whole walk. The stevedores of the Havana wharf are muscled in true giant style, enabling them to tumble and toss ponderous casks and boxes of sugar weighing hundreds of pounds as if they were empty. [...] The countenances of some of the negro orange-selling dames express a devout good-natured ugliness that I never could have conceived any arrangement of flesh and blood to be capable of. (167-68)

この描写が客観的な観察を意図していたとしても、〈最も醜い〉や〈醜悪さ〉といった表現に、筆者であるミューアの嫌悪が窺われることは否定できない。こうした黒人描写について、キャロライン・マーチャント (Carolyn Merchant) は、「ミューアは環境倫理はウィルダネスを含んではいるが、ソーローと異なり、人間についてはあまりにも無感覚であった」(160) と批判する。また、ポール・アウトカ (Paul Outka) は、「ミューアは黒人を人間として見ておらず、あるいは間接的にかなりの植物に熱狂的に近づいたあまり、彼ら(黒人)を称賛することができなかった」(166) と辛辣である。またアウトカは、「徒歩旅行は白人の読み手に対して、自然との一体感が、いかに人種問題が排除される場所を提供するかを示し、さらに恒久的な(自然と人種問題との)分離を具現化させる」(160) と述べるとともに、「人種上のトラウマ (racial trauma) は抑制され、完全に(自然の崇高さに)置き換えられる」(167) のだと語り、『一〇〇〇マイルの徒歩旅行 メキシコ湾へ』において人種問題が曖昧にされ、黒人たちの苦しみが魅惑的な自然世界へ取り込まれているのだと指摘する。もっとも、マーチャントのいうようにミューアが「人間についてはあまりにも無感覚であった」としても、非白人の人権を無視し、その存在を否定していたかと

いうとそうではない。というのも、先ほどの引用部のあと、夫婦の子供についての描写がなされているのだが、その子供について、ミューアは闇夜に溶け込んだ彼らの子供をゴム（rubber）と見間違えながらも、次のように述べている。

At the sound of “hominy” the rubber gave strong manifestations of vitality and proved to be a burly little negro boy, rising the earth naked as to the earth he came. Had he emerged from the black muck of a marsh, we might easily have believed that the Lord had manufactured him like Adam direct from the earth.
(107)

子供を「ゴム」と同一視する点に差別的見解を認めて全体を見るのであれば、そのあとの言葉からも創造されたばかりの泥人形を連想しつつ、単純な侮蔑的な記述であると解釈できなくはない。しかし、ミューアは厳格なピューリタンの父親の影響もあり、キリスト教に深く傾倒していた。したがって、自分も含め、すべての人間は神の創造物であると見なしていたと言える。とすれば、先の引用は、彼ら黒人が自分と同じ人間であるという認識に基づいていたからこそなされえた比喩と言えるのではなかろうか。通例、奴隸制推進論者や人種差別主義者は、黒人を同じ人間と見なさず、生産力を生み出す〈所有物〉と捉える。せいぜいのところ、排他的対象の他人種としてしか扱わない。これに比して、ミューアの思考は積極的に黒人を排斥するような非人道的なものとは少し異なり、1867年という時代からしても単に白人文化や社会に潜在していた白人的感覚を反映していたにすぎない。

実際、人間観という点では、ミューアのそれは一般の白人としてのスタンダードな見解に他ならない。たとえば彼はジョン・ミルトン（John Milton）に言及しながらも、ほとんど〈衣類〉を着せずに子供を地べたに寝させるような黒人の生活文化に疑問を抱いている。

... where the inhabitants wear nothing but their own skins. This fashion is sufficiently simple, – “no troublesome disguises,” as Milton calls clothing, -but it certainly is not quite harmony with Nature. Birds make nests and nearly all beasts make some kind of bed for their young ; but these negroes allow their younglings to lie nestles and naked in the dirt. (107)

実は、〈衣類〉の着用を文明化の象徴として捉える見方は、ソーローにも窺えるが、ソーローの場合、「すべての人間は、衣類のために何かをするのではなく、何かをしたいから、あるいは何かになりたいから仕事をするのだ」（『ウォールデン』14-15）と主張し、衣類や装飾に捉われるあまり、人間としての基準が過度に外面的な要素へ向けられてしまう白人文化を批判し、ミューアに対して急進的ともとれる。ソーローに比するなら、どうしてもミューアの人間観は差別的に見えるが、それはソーローが時代に先んじた自由で平等な視点を持っていたからに他ならない。それに対して、ミューアはそういった新しい人間観を涵養するほど他人への関心がなかった。実際、彼がシエラ・ネヴァダに魅せられたのも、そこが先住民の居住地であったにもかかわらず、彼にとってはウィルダネスだったからに他ならず、彼はその人間存在を排斥した自然に、聖地としての自然の殿堂を言葉の力で構築しようとした。

これまでの研究で明らかにされているように、ウィルダネスに神の存在を感じとった瞬間、ミューアにとってそこは聖地－理想化された楽園－となった。こうしたミューアの自然観は、彼を育んだキリスト教思想によるものである。人間の存在を排斥した自然に、人間の理想化された楽園を見出す姿勢には、当然ながら矛盾が内在する。だが、ミューアはその点に関して、エマスンの透명한眼球のメタファーのように自己を消し去ることをイメージし、さらに、自らの主体性を〈無〉と捉えていたようである。後に、*A Thousand-Mile Walk* の草稿にもなったノートの表紙に次のような走り書きがなされていた。「地球＝惑星、宇宙、ジョン・ミューア」これに関してウィリアム・フレデリック・バデ

(William Frederic Bade) は、ミューアの自己啓示を垣間見させるものであるとし、徒歩旅行を前に活気溢れるこのコスモポリタンな言葉はミューアが偏狭的な自然学者でないことの証明であると述べている。バデの分析の通り、ミューアは地球という枠組みを一つの構成体として、地上に存在する自然を全体論的に捉える巨視的な視野を持っていた。こうした惑星的思考の根底にあったのは、ひたむきな wilderness への美の追求であった。

結 語

レオポルドは land ethics を提唱し、土地生物たちの共有地として考えた。カーソンは、海の生き物たちの生活を身近に触れさせつつ、土壌・水質汚染の深刻さを問題視し、化学物質や放射能の危険性を訴えた。イエローストーンに始まる国立公園の誕生は、ネイティブアメリカン排除の歴史でもあったと言える。西進運動が加速しフロンティアは消滅する背景で、彼らは土地を奪われていったし、オオカミ絶滅にみられるように動物排除もまた同様であった。国立公園制度の導入は、レクリエーションの利用というジェファースン流の功利主義なくしては成しえなかったであろう。西部のソーと称される、1989年に亡くなったエドワード・アビーは国立公園のパーク・レンジャーとして働きながら執筆活動を行った作家であった。1968年発表のノンフィクション *Desert Solitaire* の中で、自動車走り回るヨセミテの惨状をなげき、公園内への自動車乗り入れ反対を主張している。1903年、自動車王ヘンリー・フォードが大衆車のT型フォードの量産にこぎつけると、大衆のレクリエーション志向は一気に高まった。その際、国立公園内への自動車の乗り入れに関して、大きな議論が起こった。しかしながら、レクリエーションという実利的な目標があるからこそ、wilderness はその存在を守られてきたとも言える。それでも、排除の歴史があったことは否定できないし、隠蔽することもできない。イエローストーンの狼は害獣として駆除された、やがてオオカミを目にすることがなく

なったため、1970年代に入りオオカミの絶滅が宣言された。それにより、天敵がいなくなったヘラジカが繁殖し、生態系のバランスが大きく崩れた。1995年、オオカミ復活のプロジェクトとして、国立公園局と魚類野生動物局はカナダより14頭のオオカミをイエローストーンに連れてきた。翌年さらに17頭のオオカミが追加された。これにより、生態系のバランスを元に戻すという目的は成果を成しているようである。しかしながら、結局のところ、マジョリティと認識される人種、あるいは種の所作によって、本来共通財産とも言うべき自然環境が脅かされ、破壊され、作り変えられている事実を無視することはできない。

（本稿は2012年度松山大学特別研究助成「アメリカ文学における自然保護創成と公共性」に関する研究の一部を成す。）

参 考 文 献

- Bade, William Frederic. "The Life and Letters of John Muir." *John Muir: His Life and Letters and Other Writings*. Ed. and Intro. Terry Gifford. Seattle: The Mountaineers, 1996. 12-388.
- Buell Lawrence. *The Future of Environmental Criticism Environmental Crisis and Literary Imagination*. Oxford: Blackwell Publishing, 2005. (『環境批評の未来』, 伊藤詔子ほか訳, 音羽書房鶴見書店, 2007年。)
- Carson, Rachel. *Silent Spring*. 1962. New York: Houghton Mifflin, 1994.
- . *Under the Sea-Wind*. 1941. New York: Oxford UP, 1952.
- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. 1965. New York: Alfred A Knopf, 1966.
- Lear, Linda. *Rachel Carson: Witness for Nature*. Boston: Houghton Mifflin, 1997. (『レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』, 上遠恵子訳, 東京書房, 2002年。)
- Leopold, Aldo. *A Sand County Almanac*. 1949. New York: Oxford UP, 1987.
- Lytle, Mark Hamilton. *The Gentle Subversive: Rachel Carson, Silent Spring, and the Rise of the Environmental Movement*. New York: Oxford UP, 2007.
- Merchant, Carolyn. *Reinventing Eden: The Fate of Nature in Western Culture*. New York: Routledge, 2004.

- Muir, John. *A Thousand-Mile Walk to The Gulf*. Ed. and Intro. William Frederic Bade. 1916. New York : Houghton, 1998.
- . *My First Summer in the Sierra*. 1911. New York : Penguin, 1987.
- . *Our National Parks*. 1892. San Francisco : Sierra Club, 1991.
- Outka, Paul. *Race and Nature from Transcendentalism to the Harlem Renaissance*. New York : Palgrave Macmillan, 2008. “White Flight.” *Race and Nature*. 151-70.
- Roosevelt, Theodore. “Nature Fakers.” 1907. *The Nature Fakers : Wildlife, Science & Sentiment* Ralph H. Lutts, 2001, 192-98.
- Thoreau, H. D. *Letters to a Spiritual Seeker*. Ed. Bradley P. Dean. New York : Norton, 2004.
- . *The Mains Wood*. 1864. New York : Quality Paperback, 1997.
- . *Walden and Resistance to Civil Government*. Ed. William Rossi. New York : Norton, 1992.
- 伊藤詔子『「沈黙の春」－世界を変えた本』、『レイチェル・カーソン』, 上岡克己ほか編, ミネルヴァ書房, 2007年, 109-122頁。
- ウィリアム・T・ヘーガン『アメリカ・インディアン史』西村頼男, 野田研一, 島川雅史訳, 北海道大学出版, 1983年。
- 上岡克己『アメリカの国立公園』, 築地書房, 2002年。
- 上遠恵子「岩波現代文庫版訳者あとがき」レイチェル・カーソン『潮風の下で』, 岩波文庫, 2012年, 251-161頁。
- 多田満『レイチェル・カーソンに学ぶ環境問題』, 東京大学出版会, 2011年。
- 八木澤高明『フクシマ2011, 沈黙の春』, 新日本出版社, 2011年。
- 原強『「沈黙の春」の世界－レイチェル・カーソンを語り継ぐ』, 1994年, かもがわ出版, 2002年。
- IUCN. 2013. the International Union for Conservation of Nature. 5. Nov. 2013. <<http://www.iucn.org/>>
- National Park Service. 2013. U. S. Department of the Interior. Dec. 3. 2013. <<http://www.nps.gov/index.htm>>
- “Nuclear Safety and Security.” 27 Jun 2012. IAEA. org. 15 Aug 2012. <<http://www-ns.iaea.org/tech-areas/emergency/ines.asp>>.
- 『国立公園－National Parks of Japan－』, 2013年, 環境省自然環境局, 2013年11月8日, <<http://www.env.go.jp/park/index.html>>